韓国――瀬戸内晴美『余白の春』の足跡を訪ねて

崔　順愛

瀬戸内晴美の著作『余白の春』（一九七二年）は、金子文子の短い二三年の生涯を描いた伝記小説である。この作品は一九七三年韓国語に翻訳され、『運命の勝利者金子文子』の題名で出版された。

晴美はこの伝記小説を執筆するため一九七一年の初夏に韓国を訪れた。日本による植民地時代に東京で文子と共に社会主義活動をした朝鮮人留学生でありアナキストの同志だった陸洪均（ゆくほんぎゅん）と梁熙碩（やんひそく）の案内で、文子がかつて暮らした現在の世宗市扶江面（せじょんしぶかんみょん）を訪れた。そして、文子の埋葬されていた聞慶市八嶺里（むんぎょんしぱんりょんり）の墓を参拝し、パゴダ公園（現在のタプコル公園）、徳寿宮、景福宮、昌慶宮の秘苑、東大門・南大門、西大門警察署、明洞一帯などを巡り、日本統治時代の残虐な弾圧の跡をたどった。また、一九七〇年代のソウルや地方の風景を作品の中に織り込んでいる。

晴美は主人公の足跡に沿って現地を踏査しながら取材し、一九七〇年代初めの韓国の変容した風景も小説に記録し時代の臨場感を喚起している。このような手法は日本文学史においても稀な試みと言えるだろう。

私も晴美が辿った道を廻ってみたいと思って、猛暑が続く八月五日早朝に家を出た。最初の訪問地は朴烈の故郷、聞慶市麻城面（むんぎょんしまそんみょん）シェムゴルギル四四番地にある「朴烈義士記念館」だった。周囲には映画『朴烈』のポスターが掲げられ、農家の塀には朴烈・金子文子・布施辰治の似顔絵が描かれ、まさに記念館に向かう道であることがひと目で分か

る風景だった。入口に一歩足を踏み入れると、その壮大な建築物に圧倒され、何度も記念館の名称を確かめながら歩を進めた。

事前に訪問の目的を伝え約束していたため、朴烈義士記念事業会の理事長のソ・ウォン氏と学芸員のウ・ソンミン氏に温かく迎えられた。簡単な自己紹介と地元名物であるオミジャ茶をいただいた後、館内を案内してもらった。展示室は朴烈と金子文子の生涯や活動に関わる書籍・雑誌・写真などが第1展示室に、獄中生活と裁判過程の様子をリアルに再現した模型・裁判記録、布施辰治の人生と活躍を紹介する第2展示室の構成だった。学芸員の説明に耳を傾けながら『何が私をこうさせたか』と『余白の春』を通してすでに知っていた内容であったが、実際の写真や資料が目の前に現れると、実在した人物が経験した苦難とその歴史的な意味が一層鮮明に迫ってきた。

館内を見学した後、聞慶市八嶺里にあった文子の墓が現在の記念公園に移葬された経緯を伺った。文子は一九二六年に獄死し、遺骨は尚州を経て同年一一月五日八嶺里にある朴烈の菩提所に埋葬された。しかし、日本の警察による監視の下、墓の手入れや参拝すら厳しい状況になって放置されたまま約五〇年の歳月が過ぎ、墓の痕跡すら消えかけた。そこで両国の同志と遺族の尽力により、一九七三年七月二三日に墓を整備し墓碑を建立して追悼式を行い、二〇〇三年に朴烈義士記念公園に改葬され現在に至っている。説明を受けた後、日本から持参した日本酒を墓の前に供え、三人共に礼を捧げた。

記念館と墓域はのどかな農村の田園風景と見事に調和しており、文子の命かけて訴えた人間の尊厳・平等・自由、権力への抵抗の思想を継承し、未来に向けてメッセージを発信する場であった。毎年さまざまな記念事業が活発に行われており、学芸員からはこれまでの学術会議や追悼ワークショップの資料、貴重なファイル資料まで提供された。すべてに深い感銘を受けた私は扶江へと向かった。

世宗市扶江（せじょんしぶがん）は、金子文子が九歳から一六歳まで（一九一二年一〇月一四日～一九一九年四月一二日）叔母宅に養子縁組して暮らした場所である。ここには住んだ跡地や記念碑もなく、資料が乏しい状況だったこともあり、錦江（くんがん）や旧小学校の位置程度しか把握できず、漠然と訪問するつもりだったが、偶然「金子文子茶室」をインターネットで知り、連絡して訪問した。この場所は郷土研究家であるイ・ギュ

サン先生が設立した空間で、文子の韓国での生活の痕跡を調査・発掘し、思想を顕彰するためのさまざまな活動を展開していた。また、金子文子が朝鮮独立に残した勲功を宣揚する事業として記念碑建立を計画していた。

茶室では、文子が東京で働いていた「岩崎おでん」の店舗で提供されていたメニューがそのまま再現されていた。遅い昼に到着した私は、山手カレーうどんと揚げ物を美味しくいただいた後、イ・ギュサン先生の案内で文子が養女として過ごした叔母宅一帯、扶容山（ぷよんさん）、錦江、栗の森、扶江小中学校の跡地、憲兵隊跡地、扶江駅などを巡った。まさにそれらの道は、文子自身が日常歩いた道であり、晴美が踏んだ道でもあった。

イ・ギュサン氏は、長年にわたり土地台帳を調べ、文子が暮らした家の番地を特定し、卒業アルバムや運動会の写真、成績表など貴重な資料を発掘してきた。その資料の一部は朴烈義士記念館に寄贈され、また茶室展示を通じて、誰もが閲覧できるよう公開されていた。「人は自由で平等であり、不正な権力には抵抗すべきだ」という文子の信念は、この空間で再び生きて息づいていた。

数日後、私は再びソウルへ向かいタプコル公園を訪れた。三・一運動の発祥地とされるこの場所は、晴美が目にした当時の風景とほとんど変わっていなかった。その後、文子の歌集を翻訳した国民文化研究所会長キム・チャンドク先生を訪問し、『余白の春』に登場する陸洪均・梁熙碩両氏の写真や活動記録の資料を頂いた。韓国政府に建国勲章愛国章の追叙を働きかける活動及び黒友会の思想を引き継いだ日・韓両国の同志が文子の墓碑建立や記念事業に尽力を果たした功労を改めて知った。最後に西大門刑務所を訪れた。数多くの独立運動家が収監と拷問を受けたこの場を歩きながら、文子が追い求めた「権力への抵抗」の精神が韓国人の抗日闘争と同じ脈略であることを改めて確認できた。晴美も同感であったに違いないだろう。

瀬戸内晴美『余白の春』の訪韓の足跡を訪ねた後、頂いた資料を読んで新たな発見があった。二〇一五年七月二三日に朴烈義士記念館で行われた「金子文子八九周忌追悼式及び韓日ワークショップ」のプロシーディングの中の亀田博の「金子文子、韓国独立運動家と共に生き影響を与えた短き生涯」によると「韓国のかつてのアナキスト同志の間で再び金子文子の存在が注目されたのは作家瀬戸内晴美が『余白の春』の執筆過程でこの墳墓に関心を持ったことに

よる。関連した調査が契機となり、七三年四月韓国のアナキストは墓碑建立準備委員会を設立し、趣旨文を作成した」とのことである。

前述のとおり、墓の整備や墓碑建立は両国の同志や遺族の努力によって実現したものだが、実際には、晴美が小説の取材のためにこの墓を訪れたことが直接的な刺激となったことを、資料によって確認できた。ここで、作品の中に描かれた陸洪均の印象的な追悼の場面を少し思い起こしてみたい。

突然、がばと身を倒して、土饅頭に全身を投げかけ、しっかりと墓に抱きついた。「文子さん、文子さん、来ましたよ。あんたはこんなに寂しいところにひとり何十年も眠りつづけて…。誰も来なくて…。文子さん、許してください。同じ朝鮮に住みながら瀬戸内さんにつれられて、導かれてここへ来たんですよ。……」

陸洪均の慟哭のこの場面は、すべての読者に深い感動と共鳴を与えるに十分である。凄惨で短い生涯を終えた文子にとって、長く空白の年月を経たのちにようやく訪れたこの「出会い／お墓参り」が、まさにいろいろな面で文子の「余白の春」を満たす契機となったと言えるだろう。

晴美の『余白の春』に導かれて聞慶、扶江、ソウルという旅程を終えて振り返ると、韓国において金子文子を称える追悼と記念事業が多様な形で根づき、彼女の思想と信念を継承しようとする努力が今なお多方面で行われていることを知る貴重な巡礼だった。そして、瀬戸内晴美の『余白の春』は、単なる伝記小説ではなく、文子の人生に刻まれた空白の時間を埋め、忘却された存在を再び呼び覚ます意味深い記憶の文学であることを察した。

二〇二五年九月八日

金子文子墓・墓碑